

「ない」と「没有」(メイヨウ)

— 中国語母語話者にみる日本語の否定表現習得及び母語干渉 —

'Nai' & 'Meiyou'

— A Contrastive Study of the Acquisition of Expressions of Negation in Japanese
and Native Language's Interference by Chinese-Speaking Learners —

桃 井 恵 一

はじめに

留学生の表現にどことなく違和感を覚えることがある。彼らの誤用が果たしてどのように起こるのか、これらの現象について母語干渉に原因を求めることで、今後の日本語教育をしていく際の目安を設定することができると言える。本稿では、中国人留学生の誤用の実例を元にして考察していくことにする。

1. 様々な誤用表現

留学生の日本語には、様々な誤用表現がある。いずれも実例である。(1)は語彙に関する誤用例である。

- (1)a. 日本には古老の文化と先進の科学技術があります。
- b. 私の興味は本を読むことです。
- c. 逆に福知山に住んでいる人々は安定の生活を暮らしている。
- d. (ダム建設は) 巨大な作用を發揮していく。
- e. サッカーをやるのが好きです。レベルが一般ですけど、とても熱心に～ (略)

(1)はいずれも中国語の語彙をそのまま日本語に単純に当てはめた例である。中国語の単語と日本語の単語には共通しているものが多いが、反面こうした類推に起因するミスが出てくる。(1)a. は中国語では「古い」という意味の単語、(1)b. は「趣味」、(1)c. は「安定している／安定した」とならなければならない。(1)d. は単語ではなく、熟語的な言い回しで、「役割を果たす」という言い方である。そして、この表現は中国語では「作用を發揮する」というため、直訳したものと推測できる。(1)e. もよく間違えられる言い方だが、「一般」とは日本語の「普通」「標準」に相当する語である。次に、品詞の影響を受けた言い誤りについて見てみる。

- (2)a. 例えば、泳ぐや、ものを買うや、映画を見ることです。
- b. 日本の生活は中国より間違い所が多いです。
- c. 初めのうちは、習慣や言葉が違いなので失敗ばかりしました。
- d. 特別は食堂の掃除です。
- e. その時にコンピュータが好きしています。

(2)の例は、品詞上の問題だといえる。(2)a.は「泳ぐこと」「ものを買うこと」と名詞化しなければならず、(2)b.は「違う」と形容詞にし、また、「違い」と「間違い」の意味の混同が問題である。(2)c.は形容詞にしなければならない。(2)d.は主述構造として捉えているが、副詞とし、「特に」にしなければならない。(2)e.については恐らく「好き」を動詞と理解していると思われる。そのため、「～ている」というその状態について表す言い方を用いている。次に見るのは助詞の問題である。

- (3)a. 私は国を帰りたいです。
- b. 中国で日本語が半年だけ勉強しました。
- c. 専門学校に卒業したあとで、天津に行って、日本語を勉強しました。
- d. 日本人に交流することができません。
- e. 大学に卒業してから、私は中国で仕事をしたいです。
- f. 日本人と友達が作ります。
- g. 今、創成大学に頑張って勉強します。

(3)a.は、本来方向を表す「へ」を使わなければならないが目的語と見なした誤用と思われる。(3)b.は主格と目的格の取り違え。(3)c.,(3)e.はそれぞれ「卒業」に「に」を使っているが、「を」を使うことがまだ習得されていない段階である。

2. 「ない」について

2-1 「ない」の文末決定性

1では、留学生による様々な誤用を主に書き言葉から拾ってみた。2では、会話表現からいくつか気になる用例について考えてみることにする。(1)、(2)はそれぞれ別の学生に別の機会に試みた会話である。

- (4)A：「昨日は映画を見に行きましたか？」
- B：「ない。」

(5)A: 「日本に来るまでに日本語を勉強しましたか？」

B: 「ない。」

こんな返事が返ってきた。これは中国人留学生だけの表現なのかと思っていたところ、テレビのオリンピック中継番組でこんなやりとりがあった。日本人アナウンサー同士の会話である。

(6)A: 「今日も日本人選手の活躍がたくさん見られましたね。」

B: 「ですね。」

また、別の機会に車内で女子学生らしい二人のやりとりが聞こえてきた。

(7)A: 「明日、雨かな？」

B: 「みたいね。」

先に示したとおり、(1)(2)は留学生とのやりとり、(3)はテレビのスポーツニュースから、(4)は友人同士と思われる人たちの会話を聞いての例である。(1)~(4)の応答語で共通しているのは「前半部分が省略」(もしくは脱落)している点である。もう一度戻って考えてみると、(1)~(4)はそれぞれ、(5)で見るように復元ができるのではないだろうか。

(8)(a) 「していない (していません)」

(b) 「みていない (見ていません)」 「見ませんでした」

(c) 「見られましたですね」

(d) 「雨みたいね」

では、どうして「省略」(もしくは「脱落」)が起こるのであろうか。ここで久野 (1978)⁽¹⁾にその理由を求めてみよう。久野は「省略の根本原則」として次のように説明している。

—省略の根本原則 省略されるべき要素は、言語的、或いは非言語的文脈から、復元可能 (recoverable) でなければならない。—久野 (1978)

(6)(7)は確かに前後の文脈から復元可能だといえる。ただ、どことなく今風の省略ではないではないだろうか。いずれも前の文を指示詞「そ」で受けると、(9)a.,(9)b.のようになる。

(9)a. 「そうですね」

b. 「そうみたいね」

こうすると自然な日本語が産出できる。(6)(7)で見た例は、久野の言うところの「省略の根本原則」、つまり復元可能な省略と言うことが出来るのではないだろうか。

仮に(4)(5)の応答語について復元を試みるとすれば、(8)(a),(8)(b)見たとおりになるのではなからうか。ただ現実として(4)(5)の省略形から(8)(a),(8)(b)へ復元するのは難しいと思う。この意味で、(4)(5)は不自然な省略といえる。言い換えるならば(4)(5)と(6)(7)の間に差異が認められる。つまり、(6)(7)とは異なり、(4)(5)においては「ない」には文末決定性がないことが分かる。

では、このような差異はどこから生まれるのであろうか。次に(4)(5)のように文末決定性が有効でない理由を、彼らの母国語に照らし合わせて考えて見ようと思う。中国語で「ない」（「でない」「ではない」を含めることも可能だと考えるが）にあたる表現は“不”と“没（有）”が該当する。

2-2 中国語における否定表現

ここでは、中国語の中でも、特に否定を表す副詞“不”と“没（有）”を中心に考察して行くことにする。この“不”と“没（有）”は「共に否定を表す副詞であり、動詞や形容詞の前に置いて動作や性質・状態の否定を表すことができる。但し、“不”と“没（有）”の用法は違う⁽²⁾。どのように違うかについて具体的に見てみることにする。同じく劉他（1988）を参照する。

(10) “不”の用法

- 1：現在或いは未来の動作・行為、心理状態、願望、好み、可能性の否定を表す
- 2：習慣的或いは恒常的な動作や状況を否定する
- 3：非動作動詞（動作動詞以外の動詞）を否定する
- 4：形容詞の前に用いて、性質、状態の否定を表す

(11) “没（有）”

- 1：動作・行為の起こったこと或いは完了したことを否定する
- 2：形容詞の前に用いて、性質・状態の変化が起こった、或いは完了したことを否定する
- 3：数量詞の前に置いて、そこまで到達していないことを表す
- 4：“没”は動詞“有”の前に置いて所有或いは存在を否定する

つまり、「不」は現在や未来、習慣的な動作などについて否定し、「没（有）」は動作・行為などの起こった結果や完了について否定する」と時間的な役割分担がある。そして、大きな違いは「所

有動詞“有”を打ち消すのに“不”は使用できず、“没”を用いて“没有”とする」点が挙げられる。この“有”には、すなわち2つの役割、2つの品詞があるということである。

呂 (1983) から“有”の用法について引いてみる。

(12)①所有・具備の意の否定

②存在の意の否定

③数の不足を表す

④比較して「及ばない」ことを表す

以上(12)に述べられているのは“有”の動詞としての用法である。(11)-1,(11)-2で述べられている用法は呂 (1983) では、(13)で見ると副詞として採用されている。

(13)「動作・状態がすでに発生したことを否定する」

(12)(13)で見たように、“有”には「動作・状態が発生したことを否定する」副詞としての顔と「所有動詞の否定形」としての動詞の顔があるのである。

ここまで、動詞の前につく否定語“不”と“没(有)”の用法を見てきた。そして、“没(有)”には2つの用法があることも確認できた。

2-3 応答詞的用法の“不”と“没(有)”

次に“不”と“没(有)”の応答詞的用法について見てみることにする。以下の例(14)(15)は疑問文に対する答えとして“不”及び“没(有)”が使われているものである。

(14)A: 你昨天去大学吗? (あなたは昨日大学に行きましたか?)

B: 没有去。/没去。(行きませんでした)

(15)A: 你喜欢看书吗? (あなたは本を読むのが好きですか?)

B: 不, 我不喜欢。(いいえ、私は好きではありません)

(14)(15)から分かるように、中国語の文で否定文を作る場合、否定を表す副詞“不”“没(有)” (“没去”は“没有去”の省略形である)を文頭に用いて否定文を形成する。また、(15)では“不”が2つ出てきている。“不”大きく分けて2つの意味がある。

- (16) “不” ①質問の返答として単独で用いる。相手の問いに相反する返答であることを示す。
 ②動詞・形容詞・特定の副詞の前に用い、否定を表す。⁽³⁾呂 叔湘 (1983)

(15)の例では、最初の“不”は(16)の①に、2番目の“不”が②に該当する。英語の場合は、否定文を構成する場合、①には、no が、②には not (don't/ doesn't)などの表現と類似している点が面白い。この点では、中国語は英語に似ている。以上“不”と“没(有)”の用法を見てきた。では、次に日本語における否定を表す語を調べてみることにする。

2-4 日本語における「ない」の用法

日本語における否定表現はさまざまある。例えば、談話研究の観点から、応答詞の研究が進んでいる。その中に否定応答詞というのがある。例えば「いいえ」「いえ」「いや」などである。それぞれ異なった用法があるとの分析もあるが⁽⁴⁾、ここではひとまず「ない」について見てみたい。「ない」の用法については、森田(1990)に詳しい。森田によると、「ない」の用法は12の用法があるという。

(17)「ない」の用法	例)
①否定	面白くないさ。
②疑問(否定疑問)	面白くない(の)かい?
③確認(同意を求める)	私の帽子知らない?
④婉曲(念をおす)	こっちがいいんじゃないの?
⑤推量(肯定推量)	行っているのではなからうか?
⑥否定推量	他に望めないのではないだろうか?
⑦感動・感嘆(肯定感動)	けなげなことじゃないか!
⑧否定感動	ぜんぜん動かないのか!
⑨願望・希望(願望肯定)	早く来てくれないかなあ…
⑩否定願望	今晚いやな夢見ないといい(か)なあ…
⑪勧誘・命令(肯定勧誘)	そろそろ始めないか?
⑫否定勧誘	学校へ行かないとうるか?

(17)で挙げた用例は、森田自身も指摘していることだが、いずれも形式がとても似ている。動作手の人称制限、動詞の制限(状態動詞、動作動詞、意志の有無)なども関係してくると思われる。「～ない」の用法には多岐にわたり、存在を否定する意味でも用いられ、否定を表す場合にも用いられる。時には弱い禁止や打ち消しを伴った要求、依頼を表すこともある。また、接尾語として程度のおびただしいことを表す用例もある。ちなみに辞書ではどのような定義をしているのであろう

か? 試しに手許の辞書で確認する⁽⁵⁾。

(18) な・い [無い]

一① 存在しない ↔ ある

② 持っていない ↔ ある

③ (形容詞・形容動詞や助動詞「だ」「たい」「らしい」などの連用形について)

打ち消しを表す

④ (て(で)をともなう動詞について) 打ち消しを表す

二 (名詞に付いて形容詞をつくる) 打ち消しを表す

ない (動詞および助動詞「せる・させる・れる・られる」の未然形に付く)

① 打ち消しの意を表す。ぬ。

② (終助詞「か」「かしら」などをともなったり、または語尾の音調を上げて) 勧誘・依頼・希望・婉曲な命令を表す。

③ (文末に「ないで」「ないね」「ないよ」の形で) 弱い禁止や打ち消しの意を伴った要求・依頼を表す

な・い (接尾) (状態などを表す語に付いて形容詞をつくる)

その程度のはなはだしい意を表す。

ここで取り上げる「ない」は(17)で言うところの!の「否定」であり、(18)では接尾辞以外の「ない」の用法ということになる。

3. 誤用例分析

3-1 日本語と中国語の「ない」について

ここで考えたいのは日本語教育という立場から見た「～ない」という点である。第2章「ない」について例をあげ「ない」の誤用分析という観点から検討してみたいと思う。

2-1 で見た「『ない』の文末決定性」で取り上げた例文をもう一度振り返ってみよう。

(4)A: 「昨日は映画を見に行きましたか?」

B: 「ない。」

(5)A: 「日本に来るまでに日本語を勉強しましたか?」

B: 「ない。」

どうしてこのような誤用が起きるのか、中国語に直してみるによりその糸口が探れるように

思われる。

(4) A：昨天你去看电影了吗？

B：没有去。（没有。）

(5) A：来日本前，你学过日语吗？

B：没学过。（没有。）

以上の(4) (5) のようになる。そこで、注目したいのが、“没有”のみの出現も可能という点である。ネイティブによると、“没有”のみの返事は、形式的、文法的ではないが、親しい間柄では使用することがあるとのことである。また、呂(1983)によると、“没”の用法では「単独で質問の回答に用いてよい」と“没有”の応答詞としての用法を認めている。以下(18)(19)の例は同じく呂(1983)から採っている。

(18)A：他走了吗？ 彼は出かけましたか？

B：没有。 いいえ。

(19)A：你听说了 君は聞きましたか？

B：没有。 いいえ。

3-2 誤用例の分析結果から

このことから、中国語を母国語としている日本語学習者が応答語として「ない」と回答するのは、中国語の“没有”を日本語に置き換えたために起こったと考えられる。言い換えれば、以上の現象は母語干渉に原因を求めることができるといえる。つまり、2-1で見た、日本語と同様の前半部分の省略（もしくは脱落）による「ない」という現象ではなく、“没有”には①動詞の否定をする場合があると同時に、②単独で質問に回答する用法、応答詞的用法があり、そのため①の用法と②の用法を混同することが考えられるからである。“没有”は日本語では「ない」の意味と教えられているため、②の用法の「ない」と返事をすると思われる。

4. その他の誤用例について

以上日本語と中国語の「ない」について見てきた。「ない」以外にも留学生には共通した誤用がある。その一つが「やすい」である。この「やすい」は、「容易に～できる」という意味の「～しやすい」のことである。これも「ない」同様、応答詞的用法で回答して来る学生が少なくない。その他、「ほしい」という語についても、より多くの語に適用する傾向にある。

5. まとめ・結論・今後の課題

3-2で見てきたように、日本語学習者が日本語を習得するに当たって犯したミスを母語干渉に求めることができる場合があるといえる。その際、中国語に限らず、韓国語であれその他の言語であれ、日本語教師には可能な限り学習者の母国語に対する予備知識があれば、彼らの誤用に対して、よりの確な指導を行うことができると思う。

今回見てきた誤用例は、中国人留学生のものに限られているが、他の国からの留学生の誤用例を検討することも重要なことだと言える。今後は、3-2で見た母語干渉以外の可能性も視野に入れて、より多くの学生からサンプルを抽出し、客観的なデータを補強する必要があるとともに、学習者の学習段階（レベル）別での検討も必要になってくるといえる。

また、誤用例とは性質を異にするが、日本語の表現で「そうですね。」から「～ですね」といった省略化現象については今後の研究課題としたい。

謝意

今回、日本語の誤用例を中国語で検討するにあたり、本学の韓金江氏、陳欣氏にチェックをして頂いた。また、留学生からも授業等を通じて多くのことを学んだ。ここに記して両氏及び留学生たちへの謝意としたい。

【参考文献】

- 久野 暉 (1978) 『談話の文法』 大修館書店
- 呂 叔湘 (1983) 『現代中国語用法辞典』 現代出版 (牛島徳次監訳) (《現代汉语八百詞》の邦訳)
- 劉月華他 (1988) 『現代中国語文法総覧 (上)』 くろしお出版 (片山、守屋、平井共訳) (《实用现代汉语语法》の邦訳)
- 梅棹他 (1995) 『日本語大辞典 第二版』 講談社
- 森田良行 (1990) 「打ち消しの言い方-「ない」の用法」『日本語学と日本語教育』 凡人社
- 劉月華他 (1991) 『現代中国語文法総覧 (下)』 くろしお出版 (片山、守屋、平井共訳)
- 三喜田光次 (2000) 『ここが違う日本語語彙と中国語語彙』 天理大学出版部
- 張 麟声 (2001) 『日本語教育のための誤用分析-中国語話者の母語干渉20例』 スリーエーネットワーク
- 彭 飛 (2003) 『外国人を悩ませる日本語の特徴』 凡人社
- ロッド・エリス (2003) 『第2言語習得のメカニズム』 筑摩書房 (牧野高吉 訳)

- 山根智恵 (2003) 「談話における『いいえ』『いえ』『いや』の使い分け」
『日本語教育学会春季大会予稿集』日本語教育学会
- 家村伸子 (2003) 「日本語の否定表現の習得過程-中国語話者の発話資料から」
『第二言語としての日本語の習得研究』凡人社
- 迫田久美子 (2004) 『日本語教育に生かす第二言語習得研究』アルク

<中国書籍>

- 呂 叔湘 (1980) 《現代汉语八百词》商务印书馆
- 刘, 潘, 故 (1983) 《实用现代汉语语法》外语教学与研究出版社
- 胡 振平 (1986) 《日语病句剖析二百例》上海译文出版社
- 穗积晃子 (1987) 《中国人学日语常见病句分析一百例》科学普及出版社
- 张 麟声 (1993) 《汉日语言对比研究》北京大学出版社
- 徐宝妹他 (1995) 《留日学生学日语错句解析》上海外语教育出版社

注

- (1) 久野 (1978) 『談話の文法』 p.8
- (2) 劉他 (1988) 『現代中国語文法総覧(上)』 p.212
- (3) 呂 (1983) 『現代中国語用法辞典』 p.28
- (4) 山根 (2003) 「談話における『いいえ』『いえ』『いや』の使い分け」
- (5) 『日本語大辞典』 p.1584